

---

# いつか叶うならば

nana

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつか叶うならば

### 【Zコード】

N6065M

### 【作者名】

nana

### 【あらすじ】

医者である優生は医大生だったころ、事故で大切な彼女とお腹の中にいた赤ちゃんを失ってしまう。

それを自分の責任だと感じ、彼は自分を責め続け、6年間過ごしてきた。

しかしある日突然、一人の女性優衣に出逢い、運命は少しづつ変わっていく。

守るべき存在、守るべき命…

仕事と運命に翻弄されながら、彼らが最後に辿り着く「ゴールとは」：

自分の全てを賭けて守つてやりたい… こんな感情が戻ってきたとき、何処となく自分の心に彼女がいたのは間違いない。

過去の俺は他人を信じるよりも、たくさんの人を傷つけ、人の心に目を向けない奴だった。むしろ、人なんてどうでもいい… そんな風に他人を思っていた。不幸にも神様だつて時には、悲しみを運んでくるときもある。それはそれで、当たり前の事なのかもしれない。決して避けることのできない運命というものが人にはあるからだ。

大切な人を最期まで守りたかった… どうして彼女が俺より先に人生を終えなければならなかつたのだろうか？ 6年間俺は自分自身を責め続けて生きてきた。大切な存在どころか“大切な命”すら守ることができなかつた俺。それを知つたとき、心までもが張り裂けるくらい倍以上の苦しさに襲われた。何よりも一番辛かつたのは、目の前でその瞬間を見てしまつたこと。大切な人が目の前で死んでしまうというのは、自らの死にも近い衝撃だった。

あれから6年。俺は割りと似合わない“医者”というものになつた。理由は言わずとも… 読んでいるみんなには分かるだろ？ だからあえて言わない。

毎日がハードな日々で大切な生命との向きあいだから弱気なんて言つてられねえよ。それが今の俺。全てをかけて守ることのできなかつた命をもう一度救いたい… なーんてな。この気持ちは医者を辞めても消えることはない。そう確信する。それはなぜか？

ある女性に出逢い、6年も遠ざかっていた感情が戻つたからだ。簡単に言つてしまえば、その子に教えてもらつたのも同然だな…。

この気持ちは何だろう？最初は自分の気持ちにさえ戸惑いを感じていた。医者としての俺か？それとも一人の男としての俺か？けど、今はもうそんな気持ちに迷いはない。一人の医者としてではなく、一人の男として彼女を幸せにし続けたい。  
だからお願いです神様。俺にその女性を愛する資格があるならば、俺に最後のチャンスをください…。

東京のとある病院。ここで仲林優生は医者として働いている。

「これでよしと…穰さん、あまり無理しちゃいけないよ?これ以上酷くなるようだったら切るしかないからね」

「よしてくれよ~先生。俺にとつちやア、この体は命そのものなんだから」

「だつたら2週間安静にすること。それが穰さんにとって今必要な事だよ」

〔冗談交じりにぴしゃりと医者らしく話す優生。〕

「すみませんねえ先生。この人つたら融通の利かない人で…こらッあんた!今度ばかりは先生の言つ通りゆつくり休んでくださいな」「分かつたよ…」

さすがの穰さんも奥さんには頭が上がらないらしくタジタジ状態。そんな一人のやり取りを見て、診察室には笑いが飛ぶ。

「お大事に」

医者になつてから3年。日は浅いけど、これまで多くの患者さんを診てきた。

不治の病で夢を諦めなければならなくなつた人、難病と一生懸命向き合いながら人生を終えた患者さん…耐えるに耐え切れない光景を目の当たりにしてきた。

それだけにそこから得たモノは大きい。“命の尊さ”だ。

医者になるんじゃなかつたつて思つた時期もあつたけど、患者さんの笑顔と「ありがとう」「う」という言葉に何度も励まされてきた。それと、仲間の支えがあるから今の自分がいるんだなあ…

「仲林先生、そろそろ回診のお時間です」

「あつ、はい…」

一枚の写真を見ていた優生。

ナースに促されて聴診器を持つと、診察室を出て行った。

今はこうやって医者らしく見えるが、彼にも計り知れない辛い過去があるのだ…

「ほあ～…つんうん…」

今日は術後の患者さんの容態を執刀医の先生に報告中。

「後は適度なりハビリを続けければ支障はないです。」

報告が終わればカルテの提出。

「君にはいつも感心してるよ。患者からの評判も良くなしね。」

「ありがとうございます」

「いれなら君に全てを任せらねそつだ。」

「西寺先生に及びませんよ」

この西寺先生も院内外どこ行つても、他の先生とは違つてかなり評判高いし。俺はそんな人氣ないんだけどな…

報告が終わつて、医局室に戻る優生。

「優生…」

「お前はもう終わったのか?」

「いや、これから回診に行くと…」

コイツは俺の小学校からの親友で、菊池哲。

同じ勤務先で、哲は内科医として働いている。  
「奥さんとは最近どうだ?」

「うへん、ばっちり…」

聞かなくともその顔見れば分かるよ。

「それよりお前も…」

「俺は必要ない」

「あ…またその話か。

「お前さあ、すげえモテてるのに一生一人でいるのか?」

一人で居るのも悪くないとけど?」

「院内のナースとかを見てみろよ。お前自分がどれだけカッコいいのか分からぬのか？」

「あ？」

「俺も他の男も羨ましいくらいだぜ」

「コイツの言つている意味が分からん。」

今は仕事、仕事と…

途中エレベーターに乗ってきたナースを横目に、小声で話す哲。

「まうつ、見る。院内中お前を狙つてるナースも居るくらいなんだ  
から…」

ヒソヒソ話していく哲に、俺を見ては落ち着きのないナース。  
人つて実に不思議だ。キャーキャー言つほどでもないのこりあ…

「そおかな？…」

6階の外科フロアで降りると、行き交うナース達は優生に挨拶をしてくる。

中には用もないのに、患者の事で話しかけてくるナースもいて、当の本人は普通に話してる。

でも、話の長さに疲れてるのか早く医局室に戻るつとする優生。

彼を留めておいつとするナース達。またに一進一退の攻防。

けどそれも…

「あなた達。早く仕事に戻りなさい」

後ろを通りかかった他の医者に止められる。

優生より3つ年上の女医、若宮静香。彼と同じ外科医だ。

彼女に言われちゃあ、ナース達も戻るしかない。女の群れから解放された優生は彼女にお礼を言いつつ、数メートル離れた医局室まで一緒に戻る。

「いつもいつもすみません、若宮先生には助けてもらつて。何と言つたらいいか…」

彼がナース達に捕まつてゐる時はたいていこの若宮先生が間に入つてゐる。

「仲林君も毎日大変ね。これじゃあ、実習生の指導も大変だわ」

「実習？ああ…そろそろあの時期か。

「実習つて言つても俺みたいに男多しですよね？」

そのほうが俺的には良いんだけど…

外科は比較的男が多い。若い医者は俺と若宮先生くらいで、

これから医者を目指す学生にとっては臨床実習を必ず受けなければ

ならない。

俺も学生だった頃は、この若宮先生に「ぴったりじゃれたっけ…

「残念。今年は何と君の大学から女性4人を引き受ける事になったの。しかもその指導医は私と君ー今回はどの子もやりがいはあるわあ

へえー…そうですか。4人も女性。指導医が…

「ええー?そんな事聞いてませんよ?」

「あれ?さつき言わなかつたっけ?」

初めて聞いたしその話…いきなり言われてもねえ…

医局室に戻った2人。部屋に居たのは医局長の田悟先生。

「どうしたんだ2人とも?何かあつたのかい?」

歯を磨きながら出てきた田悟先生。

「あつたもなにも…」

れつきの話しお詳しい内容を聞こいとする優生。

田悟先生は待てと言わんばかりに、口を灌いでから戻つてくれる。

「それでどうしたんだい?」

「なんで俺が指導医に?…

その理由が知りたくて聞こいつとする優生。

5分後…。

「それは、君の実力を見込んでの事だよ。Dr.・若宮の時も君と同じ歳で指導医になつたくらいなんだから」

「あれへ、そうでしたっけ？」

「ふうん。若宮先生も俺と同じ歳で指導医に…」

「この人俺より3つ上だから、31だっけ？」

「と聞つことで、君には期待してるよ。頑張りたまえ」

「そうこうことだつたのか…」

「みづやく自分がどうこう立場になつたのか分かつた様だ。」

「俺が指導医に…ん…」

「これが運命のきかつけになるとは知る由もなかつた。」

久しぶりの非番。ここ最近、休めてないからな~今日は…

「 ～ ～ 」

一眠りしようとしている時に誰だよ…

「 はい… 」

せっかくの睡眠時間を邪魔されて機嫌斜めの優生。

「 たまには家に来い! 」

電話を耳に当てなくとも聞こえるこの声の持ち主は俺の親父。

たまにはゆっくり休ませてくれよと言つても、ムダだし…だから、

「 わかった。2時間後にはそっちに行く 」

と言つて、電話を切る。ほんの数十秒のやり取り。

まあ半年振りだから、ちょっとくら顔出してくるか…

きつかり2時間後…

「おひびきさん

「おひ、満。いこむじしたか？」

「うそー。」

可憐なじ子に出てくれたのは妹の娘で、満。4歳でやんちゃな子だ。

「ママの所に行なうか？」

満をだつこすると、そのままビングに行く。

「お、来たか」

「親父、旦からやんなに飲むなよ……」

この人、相当の酒好きだからね。飲みすぎると…

「お前も久しぶりに来たんだから、一緒に飲めー。」

あちやー…こつや完全に酔つてゐる。

「あなた、お旦から飲みすぎですよー。」

後ろから親父の德利を取り上げたのは、俺の母さん。

「母さん~後、一本だけ…」

「ダメです！」

母さんに怒られて、しょんぼりする親父。

親父も親父で、母さんは頭が上がらないんだよなあ。

「優生も今日はゆっくりしていきなさい」

「ああ」

うーん。さつきから美味しそうな匂いがするけど…

「お母さんー！」

奥から、威勢のいい大きな声が聞こえてくる。

「あつお兄ちゃん、久しぶり」

「よつ、元気にしてたか？」

妹の杏。俺とは4つ下で、一年前に前の旦那と離婚。

今は一人で、満を育てている。

妹に会うのは離婚して以来、一年ぶり。

「わあわあ、できましたよ～」

おっ、母さんの料理か…久しぶりだなあ。

「たぐやん匂い上がれ」

食べ始めようとした瞬間、タイミング悪く、呼び出しの電話がかかってくる。

「悪い仕事だ…」

その言葉に、親父たちはバシの悪そうな顔をする。

「医者ついで、大変だねー」

「思つてこむよりも大変だよ」

人の命を預かる仕事なんだから、暢氣<sup>のんき</sup>に休んでなんかいられないのが事実。

「何してるのー早くこきなせー」

「おお、そうだった…」

母さんに急かされて、出ようとする優生。

「おこー！」

こんな時になんだい親父は…

「無理するなよ…頑張れ」

去り際に親父が一言投げかける。

「おー…」

俺が今親父達にできる親孝行、それは「仕事を頑張る」ことなんだ  
。」

「はあ……どうしても行かないとダメですか？」

「何よー? 嘘の母校でしょ? シャキッとなさー! ほひつ

若富先生に心中を押されて入ったのは俺の母校、栖鳳医科大学。  
今日は指導医が代わったという事での挨拶らしい。ところの、も、俺  
が医学生だった頃の苦手な教授がまだこの大学にいるらしい。  
しかも、その教授に挨拶をするんだ…

「どうぞお入りください」

「ほひつ、しつかりしなさい」

事務の人がわざわざ教授室まで案内する。

わひかと回じよじよまた若富先生から一喝いれられる。

「はいはい。わかりましたよ…」

中に入ると、教授はパソコンで何やらやっていた。

「おお～お待ちしてました。私が医学部教授の沖矢俊之です」

俺たちがソファーにつくなり、名刺交換。

別に自己紹介しなくても分かってるんですけどね…

「ええと若富先生に、ん？ああ、仲林先生ですか」

俺のことを思い出したのか、じい～と顔を見てくる。

それもそのはず。在学中は沖矢ゼミにいたんだから俺。

「お久しぶりです先生。今年から指導医になった仲林優生です」

「君今年でいくつになる？」

「28です」

俺の若さに驚いたのか、俺と若富先生の顔を交互に見る。

笑いを堪えているローラ・若富。

それから今年の実習について若富先生が説明をする。

まあ、俺が受けた時とほとんど変わつとらんがな。

俺たちが働いている聖マリア総合病院に実習として来る学生は全ての科合させて、延べ40人。

なのに意外にも外科にやつてくるのは4人。

最近、医学部に入つても医者を諦める学生が多いからなあ……

「4人とも私のゼミの学生でね、この仲林君も学生の時はそうでしたよ」

「わつですかあ

挨拶から世間話になつてゐる……

待つこと30分……

「それでは若宮先生に仲林先生。学生たちをお願いします

「いいえ、こちへ。では失礼します」

「わつのこと」で教授の部屋を出る。

「若宮先生、挨拶に来ただけなんだから、ムダ話はやめて下さい」

「うふ~? うかしら? 君が学生だった頃の様子も知る事ができたし

(俺が学生だった時のことを知つてほしやるんだよ……)

階段をおりて、角を曲がろうとした途端にこじで思わぬアクシデント。

「わつ」 「わつ」

勢いよくぶつかり、無数のレポートしき紙が一面に散らばる。

「すみません…」

その学生はかなり急いでたらしく、散らばった紙を拾い集める。

「いめんなさい…」

俺も慌てて、拾つのを手伝つ。

元はと言えば、よやく見してた俺が悪いからね。

「いの先生は体が大きいからぶつかるのも無理な…よ

若富先生も後ろで余計な一言を言いつつ、手伝つ。

「…」の先生は全部拾い終わると、その見知らぬ学生にレポートを渡す。

「先程はすみませんでした。僕の不注意でこんな事に…」

「いえ、そんな…」ちがいすみません…よく前も見ないで…

見ないでどうか、あの量じゃ見る暇もないでしょ？

「仲林先生、私呼び出されたから先に病院戻つてるわ

「そうですか？気をつけて戻つてください…」

早々と先に行つてしまつた。・若富。

「他に…ん？」

よく見れば学生の左指からは血が流れていた。

「怪我してないじゃないですか！？」

「えっ？ これぐらい大丈夫ですよ」

「先生わんはそいつは、左手を引っ込める。」

「医者は些細な傷でも治すのが仕事なんですよ。ま、うう」

優生はポケットからハンカチを出すと、彼女の左手を取り、

出血を止める。それから絆創膏と…

「よしつ、これで大丈夫」

手当てを終えて、優生と女学生は立ち上がる。

「ありがとうございます。ハンカチは洗って返すのです…」

「いやつ、良いですよハンカチの一枚や一枚ぐらい」

ハンカチを受け取ろうとする優生。でもその女学生は  
「貸してもらったものはキチンとして返さないとダメなんです」と言つて手を引つ込める。

（しつかりしてる子だな…）

そう感心した優生は彼女に自分の仕事先の名刺を渡す。

彼女は名刺を受け取りながらも、名刺を見ては優生の顔を何度も見る。だつて…

「僕の顔になんかついてます?」

自分の手で何かついてるのかと顔を触る優生。

「あつ…」

彼女が一言言いかけようとした時、後ろから別の学生がやつて來た。

「優衣…ビ」に行つてたの?早く沖矢先生の所に行くよー

「うそ、今行くー!」

あれ?あの人は?

「どうやら優生はその一言も聞かないとま先に行つてしまつた。

「今度の実習のことで説明があるらしいから早く早く

「うそ…」

「どうやらこの学生は優生が働いている病院の実習生らしい。

優生も優生で人の話を聞く前に行つてしまつとはねえ~。

一週間後：

とつとう臨床実習の日がやつてきた。

実習生との対面の為、医局長と部長に伴われて小会議室へと向かう。

「仲林先生、しっかりと鍛えてあげてくださいよ」

「はい」

部長に言われてはしっかりとやるしかない。

そこまではいいんだけど、この後が俺にとつては驚きだった。

実習生の中にあの時の子がいたなんて…

「よつやく氣づいたが、この鈍感」

「は？なんですか？若宮先生は知つてたんですか？」

優生の言葉に先生はそんなの知つてたわよではつきり頷く。

実習生が白衣に着替えて戻つてくる数十分の間、俺たち指導医一人は小さかしいやり取りをしていた。

「あつ、来た来た。ほらつ仲林先生、学生さん達に説明を」

それぐらい分かつてますよ…

白衣を着た4人の学生を前に、これから的事を説明してから全員で医局室へと向かう。

俺の時は半々の割合での実習だったんだけどな…

これじゃあ大奥だよ。

インター…ン6ヶ月ねえ…なつかしいなあ。

厳しいイメージがある外科だけど、ここには色々な個性を持った医達の集まりだから

最後までめげずに頑張りましょ…

若富先生がそう言つと、緊張していた学生達の表情も緩んでくる。

ここに4人を一組に分けて、それぞれが学生を指導する。

若富先生が加賀谷さん・藤堂さんを受け持ち、あの時の学生、

香川さんともう一人鈴木さんを俺が担当する事になった。

ある程度の事は大学で学んできてるはずだから、皆さんは2人で一組、患者さんを受け持つて診察をしてもらいます。

皆さんはこれからその患者さんの担当医になる訳ですから、

気を緩めることのないよつ、しつかりとやって下さご。

もし、解らない事があったら担当の先生になんでも聞くよつて…

医局長からお決まりの説明を聞いてから、ペアに分かれて病室に向かう。

「これから2人に受け持つてもう1つ患者さんは先天性心疾患を患っている7歳の女の子。実習なので詳しい診察は一人にしてもいい、カルテも作つてもいいです。」

これからこの2人に任せようとする患者は俺もインターの時に診てる、如月麻奈ちゃんだ。

小児病棟から移ってきた子で、俺が医者になつてすぐにこの子の担当医を任せられた。

だからもう、4年くらいになるかな…

今回は実習とあって、詳しい説明は麻奈ちゃんの両親にも

時間をかけて理解を貰えるよいとした。

反対するかと思つたら、快く許してくれ、麻奈ちゃんも

楽しみにしていることだつた。

そんなこんなで、病室に着くと扉を開ける。

今日は麻奈ちゃんのお母さんが来ていて、麻奈ちゃんも容態は落ち着いており、終始にこやかだ。

お母さんが麻奈ちゃんに俺が来た事を知りせると、可憐ひじい顔をベットからのぞかせ、

「今日から新しい先生なんだよね？」

と、俺に投げかける。

前にも麻奈ちゃんには何度も話しおじいをした。

分かっていてもこの子にとっては寂しい所もあるらしい。

「でもねえ、麻奈ちゃん。ここにいる2人の先生も僕より優しい先生だよ？それに僕は、この先生達をサポートしていくのが今のやるべき事だからね……麻奈ちゃんの病気を治すのはみんなでやつしていくことなんだ」

そう言つと、俺は後ろに下がり後は2人に任せ、診察を見守る。

香月さんが麻奈ちゃんを診て、鈴木さんが記録。

初めてだから間違えるのも無理はないが、所々誤診が見受けられた。

その場では何も言わないので、病室を出たあと2人を呼びつける。

「今日は初めてといつとで横槍は入れなかつたけど、患者は重い病気を患つてゐる女の子。それは分かってるよね？」

「はい」

真剣な表情で優生の話を聞く実習生。

「じゃあ、医者がやつてはいけないことの一つは？」

あえて今日、診察を担当した番田を元に聞く。

「誤診で誤つた治療をする」とドクター。

「やつ。今日はその誤診が多かった。診察だけだからまだしも、治療法まで間違えたら彼女は命を落とすハメになる」

初日からキレイ言葉だけど、これは医者になる上でしかたのないこと。

ん~これ、前にもどつから聞いたような...

「とつあえず、カルテはあらかじめ作つて持つておいてください」

と言つて、俺は先に医局室へと戻る。

その帰り、若宮先生もちよつと終わつたりじへ途中で行き合へ。

「アーチゼビーフ~」

あまりよくなかったぽこよくな顔してますよ若宮先生...

「誤診が多かったですね。でも一人やりがいありますよ?」

確かに間違いは多かつたけど、あの番田を元とこいつは何か...

「あの時の子でしょ?番田を元つてこいつ」

「はい」

俺が言わなくとも若富先生には何でも分かってしまつんですね…

それから彼女達がどのよつたな手順でこれまでの診察した分のカルテを作つたかは知らない。

持つてきたのは30分してからの事だった。

若富先生の方も同時に来て、俺と先生は誤りがないかチェックする。

「いい違つ。いいも、後これも…」

先生の所は相当間違いの箇所があつたんだなあ…

わざわざひらめ…

「つーん?んー?…」

あつ、これはいいで、1日1~3回。あとまじめ…

「経過は?書いてないよ?」

「すみません。書き忘れました」

「おいおい…肝心な所を抜かすなよ…

「まあ初日は間違えるのも当たり前だけじ、まず第一に患者をよく

知つた上で診て

この間違え方にも程があるわ…

「心疾患でもこの子の場合は特異なケース。ただ強心剤を打てば良いもんじゃないよ?それに投与する量も違う。大学で学んだことを活かそうとする気持ちはわかるよ?でもここは病院。大学じゃない」

あまりの氣の緩みに少々厳しい言葉を投げかけるD・仲林。

カルテを閉じ、彼女達に向き直る。

「君達は知識とやる氣は充分にあるんだから、もう少し患者と向き合つよ。次からは僕も所々入るんで、一緒に頑張りつ」

「はい、お願ひします」

厳しかつた優生の表情に笑みがこぼれる。

何も半ば成功ばかりじゃないんだよ…

「先生らしさ」と言ひじやない?」

「これでも若宮先生と同じ指導医ですか。先生には及びませんけど」

今思つたけど、俺が言つてゐる言葉つてほほ若宮先生の売り言葉じやん。

どうりで聞き覚えがあるわけだ。

実習が始まってから2週間がたつたある日のこと。

この日の午前から彼女達は麻奈ちゃんにつきっきりだ。

これと言つた訳も無く、何かあつたらすぐ連絡することを条件に許可した。

何か話したい」ともあるのかね?…

その頃病室では…

「あつ先生、そこ折りかた違うよ」

「うん? じうかな?」

折り紙が好きな麻奈ちゃん。

2人に教えながら一緒に折つてます。

「先生、忙しいのにすみませんねえ…」

「いいえ、これは私達がやつてる」とですから気になさらないで下  
さい」

優生に一喝入れられた甲斐もあってか、彼女達のミスはここに最近、  
目立たなくなつた。

そのお陰で麻奈ちゃんともすぐ仲良くなり、今まで「」折り紙を一緒に折るほど仲良し。

「麻奈、そろそろ時間だから折り紙はまた今度にしようね」

「ハーハー」

診察の時間。

麻奈ちゃんはベットに体をもたれると、いついつ。

「麻奈は強いもん。だから病気なんて怖くないもん。大きくなったら優生先生みたいなす」」お医者さんになるの

「そうだね、麻奈ちゃんは強いから大丈夫だよ。それ優生先生が喜ぶだろうなあ」

香円さんが麻奈ちゃんの胸に聴診器をあてながらいつ。

(優生先生かあ…)

「ハックション…！」

「あら？ 風邪？」

「ただのくしゃみですか…」

自分の話しかけてるなどわかつていなー…

「うん、OK。後はこれをいつしてやれば大丈夫。問題ないからいいよ」

1ヶ月たつて、ようやく慣れたんだろう。

ヨシヨシ…

ミスもなくなつてるし、俺があまり間に入らなくとも平氣になつてきたかな？

「あの、仲林先生つて私達と同じ栖鳳医大で沖矢ゼミでしたよね？」

「うん、何かと田付けられてたけどね。どうした？」

香円さんが何やらためらつていて、それを鈴木さんが後押しする。

「忙しいのに申し訳ないんですけど、時間がある時にもいいんで、私の書いた論文を見てもらいたいんです」

分厚い紙を出すと、すまなぞそつた雰囲氣で優生を見る。

「大学で先生の論文を見せてもらつた時、沖矢先生がこの論文を超えた内容を書けた人はいなって言つてたんです」

「え…あの先生がねえ」。

「仲林先生に講評してもらいたくて」

「沖矢先生には見せた？」

彼女は頷くと、口元続ける。

「良いとは言つてくれたんですけど、理由は言わずに笑うばかりで  
……」

出たつ……あの笑い。何かあるんだよ。

「分かつた、その論文見るよ。そんな大した事は言えないけど」

香川さんから論文を受け取る。

「ありがとうございますー！」

「いやいや、俺もいつこの時期があつたからさ。じゃあ」

そつと、優生は仕事に戻つていった。

少なからず、香川さんの心は今までにない気持ちに揺れ動かされた  
いた。

優生はそつともないみたいだけど……

俺が書いた論文って4年前か…

どれどれ、香月さんのはと…

しかしあ、ワードで結構打つたねえ～この子。

「現代の外科療法について」かあ…何?何?

すっかり香月さんの論文に読み入ってる優生。

急患や容態の悪化した患者もいなければ、手術オペも入ってない。

だからある意味暇だ。

「何を読んでいるのかね?」

「あつ医局長、お疲れ様です。実習生の課題論文ですよ。僕が受け持つてる香月さんっていう子の」

あと少しでその論文を読み終えるD-r仲林。

「ほお～論文かあ。君の論文もたいしたもんだがね」

「えつ?医局長、僕の論文読んだんですか?」

自分の書いた論文が他人に読まれていたことに驚き。

「部長も、ここにいる外科の先生達は君の論文くらい読んで知ってるよ」

えつし〜〜〜！？

さらに驚きを隠せない優生。みんな頷いちゃつてるし。

「まあ、部長も唸るほどだったから、君にああこう事言つたんだろうね。じゃ、お先に失礼」

ああーあの事か…  
でも意外だよな…

1時間後、ようやく香月さんの論文を読み終えた。

うーん?別に何もないけどなあ。良い論文だし、筋は通ってる。

なんでだ？あの沖矢先生があの笑いをするなんて……

「どうした？ 難しそうな顔して」

ああ若宮先生

ちよべも回診から戻ってきたDr.若宮。

優生のデスクの上にある論文を見つけると、手にとってパラパラとめくる。

「へえーあの子の論文かあ」

# 興味ありげに読んでる先生。

「良い論文で何もこれと言つた問題はないんですよ? ただ、あの沖矢先生が良い論文と言つただけで、その後理由も言わずに笑つたら

しきです

「ふーん…」

こちちらもすっかり読みふけつている人。

勝手に読んでるし…

「俺も回診に行つてきます」

「…いっちらつしゃーい」

すっかり論文の方にいちゃつてるし。

まあいいや、良い内容なんだから。

でも、沖矢先生が笑つた理由俺にも分からんなあ…

「仲林先生、読んでくれるかなあ？」

「大丈夫！絶対読んでくれるって」

一方、外で休憩中の香月さん実習生4人組。

自分の論文を読んで、どんな事を言つてくるのか不安らしい。

「心配することないって。あの先生、今までウチにたくさんアドバイスしてくれたじゃない」

「それに若富先生が教えてくれた事なんだけど、仲林先生、優衣の事すごいほめてたよ」

「えつ？」

それ初耳…

「あんな優しい先生がダメ出しする訳ないじゃん？」

自信を持つて優衣に言つ同じペアの玲子。

「自信持ちなよ！」

友達を励ます女3人組。

「ありがとうみんな…」

すっかり元気になつた優衣でした。

今日は優生の執刀デビュー。

いよいよ彼が患者を手術する日だ。

今朝は部長から、

「君がもう少し早く執刀デビューしてれば……」

なんて言つてた。

患者は早朝運ばれた40代の男性。

病名は横隔膜下膿瘍。

急性の腹膜炎からくるものが多い。

つこわつとき診断が終わり、緊急オペ。

「君が早くメスを持つていれば助かる患者も増えたのに

「時間ないですよ、医局長。急ぎましょ

もう準備を終えている優生。

「お手並み拝見といきますか」

ぶつぶつ言しながら助手を務めるD「若宮。

三人の姿は手術室へと消えていった。

「おお～」

医局長とDr.若富がなんで感嘆の声を漏らしているのかといつと、優生的確でスピーディーなメス裁きが凄いから。

執刀中の彼の顔は真剣そのもの。

「チユーブ」

腹膜炎の原因である虫垂を切除して、腹腔に溜まっている膿を排出。

そんなこんなで感心してこらへり。

「縫合」

「！」拍手をせめ

後はD-若宮が腹部を縫合するだけで、優生の仕事は終了。

その後も患者は順調に回復を遂げ、2週間後に退院したのは言つまでもない。

「先生ありがとうございました」

患者さんの退院の見送り。

手術が終わってからというもの、ひつきりなしに患者の家族から「感謝の気持ち」ということで差し入れが来たり、他の科からはオペの依頼があつたり…休む暇がない。

見送った後も病院へ戻り仕事。

「優生！」

自分の名前を呼んだ声の主は、小児科勤務の朝比奈由香。

俺と同じ大学で、幼馴染の一人。

「あんたが手術した患者、みんな問題なく順調に回復してきれいに完治してるつてよ」

「そりゃよかつた」

絶対なんかあるな「イツ…

「それに、院内その噂で持ちきり」

「お前何か用があるから来たんだね？」「…」

なかなか本題を持ち出さない由香にズバツと言つ。

「よく分かったわねえ… ちょっと小児科へ来て」

言われるままエレベーターに乗つて、小児科フロアへ行く。

「入つて」

医局室に入ると、聞いての通り5人しかいなかつた。

そのうち医局長らしき人がやつてきて、

「噂はかねがね聞いてます仲林先生。医局長の村田です」

「よろしくお願ひします。で、用件はなんですか?」

「どうぞお掛けください」と言われ、ソファーに座る。

「先生には折り入つてある患者の手術の依頼を…」

あー。また来た。

「あの失礼ですけど、僕はそんなに凄くないですよ? 手術なら他の

…

と言つて立ち上がるうとした時、由香が凄い表情で優生を睨み付ける。

その圧力に負け、座り直す優生。

「どのよつなオペで?」

タジタジのロ「仲林。

斜め後ろで朝比奈が睨んでるんだもん。

「骨肉腫です

なーんだ。それだつたら、他の先生でも…

「だつたらなおひ…」

「「ゴッホン!」…」

「げつ…そんなに怒るなよ~

「患者は12歳の少年で横内涉。朝比奈君、病室へ案内して」

「はい」

結局この手術、引き受けなきやいけないのか…

「せつかも聞いたと思つけど、患者は骨肉腫による悪性腫瘍が上腕骨に発症。一週間前に入院した患者よ」

「一週間?かなりたつてるな。。。

「なんですが手術しなかつたんだよ?骨肉腫なら他の先生にでもできる」とじやないか

「「Jの子の場合は腕が立つ人じゃないとできない問題なの。診れば分かるわ」

俺、そんな大した事してないんですけど…

501号室到着。その渉君とやらに初対面。

「横内さん、今日から渉君の担当医になる外科の仲林先生です」

病室にいたのは渉君と「両親2人。

前から話しさ聞いていたんだろ？か、立ち上がって、

「先生、どうか息子を助けてくださいーお願いします！」

子どもがいる前で必死に言うもんだから

「お父さん、お母さん、どうか落ち着いてください。まだ治らないと決まつた訳じゃないんですから。とりあえず、今から診察を始めますので」

と言つて、始めるしかない。

「渉君初めまして。今日から君の主治医になる仲林優生です。よろしく」

「よろしくお願ひします…」

元気がないのも無理ないか…

彼の周りをよく見ると、野球が好きらしくグローブやボール、有名選手のポスターとかが張つてあった。

「これから君の体の状態を診るから、巻いてある包帯全部はずすよ」とは言つものの、包帯を取つた後見たことのない光景を目の当たりにして、言葉が出なかつた。

「これは…」

上腕骨にできた腫瘍など言えども大きいからだ。

触診で患部を軽く触つてみる。

「うーん痛くないかい?」

「少し痛いです」

「少し痛いではないと思つけど…

涉君の顔色は抗がん剤の打ちすぎで青ざめていた。

カルテを見る限り、野球の試合中に痛みが走り転倒。

その後この病院に運ばれ、悪性の骨肉腫と診断。

手術は不可能な事でもないが…

この大きさじやなあ…

「ちょっと失礼します」

朝比奈を連れて、病室の外へ出る。

「詳しい検査をしてみないとよく分からぬから、今日の午後、渉君を外科病棟に移して」

「わかつた。私もできる所までは最後まで協力する」

話しが終わると、再び病室へ戻る。

詳しい説明を「両親にした後、俺はその準備のため外科の方へ戻つた。

「随分遅かつたじゃない？実習生なら診察に行つたわよ

「ああそうですか。あの…若宮先生に相談があるんですけど、良いですか？」

「うん？いいけど。あなたにしては珍しいわね、相談とは」

しかたないだろ…普通の相談じゃないんだから。

俺達は使つてない診察室へと行き、小児科から借りてきたレントゲンやら資料を見せながら話しを始める。

「(i)のレントゲン見て分かると思うんですけど、骨…」

「相当ひどい骨肉腫ね」

俺が言い切る前に言わんといで…

「患者は12歳の男子で今日の午後、小児科から外科へ移つてきました。その担当医が俺で、この分だと手術の方法は一つしかないんですよ…」

「でしょ「うねえ。大きさが大きいから化学でやつたとしても時間かかるし、患肢温存は難しいんじゃない？」

「だろうなあ……この状態じゃ……」

「でも君の考え方としては切<sup>切り</sup>断<sup>せざ</sup>すに治したい訳でしょ？」

「やうです。患者もですけど、家族の必死な姿を見るとどうしても

……」

あの子もだけど、両親の子供を想<sup>う</sup>の姿を見るとなあ……

「うーん……難しい壁にぶつかっちゃったわね。検査次第だわ」

やつても結果は見え見えなんだけどね。

「そこで先生には大変だと思うんですけど、あの実習生2人を先生の方に戻せないでしょ？僕も時間が空いた時に入るんですけど

「戻すも何も、そんなの私には平氣よ。大丈夫、任せなさい！あの2人は私に任せて、君は患者の治療に専念しなさい。私もその患者については出来る限り最後まで協力するわ」

「おお～若富先生……」

「あらがとうござりますーーー」

こうして俺はもう一人の患者、横内渉君の主治医になつたのだ。

すべてうまくこくとは限らない。

それが現実なんだよな? 楽

「うーん… やっぱり…」

涉の骨肉腫に関する検査が全て終わり、思わしくない結果だったようだ。

優生がそう悩んでる時、小児科から由香がやってきた。

「じつだつた? やっぱり…」

「良い結果ではない。コレはやっぱ関節離断しかないな

関節離断…。

「関節」と腕を切断するところだ。

やがて優生は言葉を続ける。

「他の臓器や部位への転移はない。ただ、腫瘍の大きさからして関節」と切斷しなければならない

その言葉を聞いて期待してた言葉とは裏腹に由香の表情は変わる。

「嘘でしょ？……だつてまだ12歳の男の子だよ？」

驚きを隠せないでいるローレン比奈。

「嘘じやない、これが現状だ。現に10歳で腕を切断した子だつて  
いるんだ」

俺だつて辛いわ！こんな状況…

「後は涉君の両親に説明して、手術の日程は容態を見ながら話し合  
つて決める。その時にはお前も…」

「許やない…」

由香？

「！」となやり方ウチは絶対許さない！結局あんたも他の先生と一緒に  
て、患者の事は考えずに助かればそれで良いと想つてたんだね？」

「…」

「あの子には夢があるんだよー。あんたはそれを奪つしません？」

「風の！」と優生を責めまくる由香。

「栄に約束したあの言葉は一体何だったの?『命だけじゃなく、その夢への可能性』と助けてやる』って言葉…あれは結局嘘だったんだ

だ

「嘘じゃない…！」

亡くなつた彼女の事を出され、思わず声を荒げてしまつローレ仲林。

「診察に行つてくる…」

自分でつて本当せりんなやり方で手術なんかしたくない…

他にも別 の方法はいくらでもある。

ただ、それらが成功する確率はとても低く、回復も見込めない。

最悪の場合、生存率が50%もないだろ。

そんな中で手術をしたつて余計、彼の命を危ぶめるだけだ…

そういうことをひたすら、彼の病室へ来てしまつた。

「あつ、先生だ！」

「あ……」

涉君は麻奈ちゃんと同じ部屋の302号室。

麻奈ちゃんが涉君と遊んだらしく、涉君は体調が悪くても、麻奈ちゃんの相手をしてる。

「麻奈ちゃん。先生これから涉君とお話しがあるから、優衣先生た  
れとお散歩に行つてくれないかな?」

「うそー。」

聞き分けの良い子で、自分から香取さんの手を引いて病室を出て行  
つた。

「おっくじ休んでないとダメだぞ?」

「麻奈ちゃんのお母さん、……最近来てなくて麻奈ちゃんが寂しそ  
うだったから……」

「お……

やつこんばんは麻奈ちゃんのお母さん、仕事が忙しくて来てないんだっ  
け?」

涉君の両親もだけじゃ……

「今日はなあ先生、涉君に話をしたくて来たんだ」

病気の事かと思つて顔を背けたんだろ。

まあ…今日は…

「先生な昔、結婚するはずだった大好きな人をこの病院で亡くしたんだ…」

「ええ…ええ…？」意外な事実だこと。

その言葉に渉は優生の顔を見る。

優生の顔はどこか悲しげな表情をしていた。

といつのも無理はない。

これは本当の事なんだから…

「その女性も先生と一緒に、医者になることが夢だった。でもある日、事故に巻き込まれて1週間後に死んだ。それでさ一番辛かったのが、彼女を守る事ができなかつたのもそうだけど、彼女のお腹の中にいた赤ちゃんまでも死んでしまつた事かな…結局、自分だけが医者になつて、彼女は医者になることができなかつた…」

「」で一回息を吸い、さらには続ける。

「でもな、その女性死ぬ何日か前にこうつ言つたんだ。『そこで挫折してしまえば夢は消えてしまう。でも、絶対叶えようといつ気持ち

と行動があれば、夢は必ず叶うんだよ。努力は結果を裏切らない  
つてな……」

この言葉に彼は何を感じたのだろう……

「僕の病気って治るの難しこんでしょ？」

「うう……小学生ながら勘が鋭い。

でも違うんだ……

「治らないとは限らない。渉君の治してやるってこの気持ちと努力があれば、先生も全てを賭けて、渉君の病気を治してやる」

優生の顔は真剣そのもの。

渉も彼から目を反らさない。

「うん！ 僕頑張る！」

よつやく病気に対しても前向きな姿勢を見せた渉君。

並大抵の事ではないと分かっているが、患者の為だったら、医者としての人生を賭けてでも救いたいモノがある。

（俺は絶対、この子を救つてやる……）

そんな情熱の意思を燃やしながら、渉に誓う優生。

その様子を病室の外からじつと見つめてる人がいた。

「仲林先生…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6065m/>

---

いつか叶うならば

2010年11月25日11時11分発行